

# なかよくする子ども

保育のつどい

一人ひとり、みんな違ってみんないい、と感じる体験をしている



「だれとでもなかよくしてほしい」これは、ほとんどの親が願うことではないでしょうか。しかし、そもそもみんなとなかよくすることはどうのことなのでしょう。そして、それは可能なのでしょうか。多くの大人も、みんなとなかが良いかと問われると、「はい」と答えられる人は少ないのではないのでしょうか。あたりまえのことですが、気の合う人、合わない人がおり、なかのいい人、あまりなかのよくない人もいます。かといって、その気の合わない人と常にけんかをしているのかというと、そんなことはありません。おそらく、その合わない人に対して、人として大切に接しているのだと思います。

この「なかよくする子どもを育てる」という願いには「一人ひとり、みんな違ってみんないい、と感じる体験をしている」という副題がついています。この副題は「なかよくする子どもを育てる」ためには、こんなことが必要ですよということを示してあります。つまり、人にはそれぞれ個性があり、違いがあるけれども、人としてそのままの存在として認めていけるような体験をしていくことが必要なのだということです。

それでは、具体的にどんな体験、経験が必要なのでしょう。子どもたちは生活の中でけんかをすることがあります。よく目にするのは、大人が「ごめんなさいって言おうね」と促し、子どもが「ごめん」といい、さらに相手が「いいよ」というような、ある種パターン化されたやりとりです。一見、けんかはおさまり、仲直りができたかのように思えますが、当の子どもたちはどうなのでしょう。あまり納得したような顔をしてないような気がします。

こんな時こそ、形式的な「ごめん」だけではなく、なぜけんかになってしまったのか、友達はどうな思っていたのか、自分はどういったおもいだったのか、互いにしっかりと言い合えることが大切なのではないでしょうか。そんな中で、子どもたちは友達とは違う思いを持っているということ、ほくはこう思ったけど、ともだちは違う思いを持っているということを学んでいるのだと思います。そんな経験が、互いの違いを認め尊重していくことに繋がっていくのではないのでしょうか。

とかく、私たちは、みんなとなかよさそうに遊んでくれるのが一番いいと思いますが、大人がすべての人となかよくすることが難しいように、こどもにとっても難しいものです。こどもにも、それぞれ思いがあり、人と違う考えを持っています。時にはともだちと対立することもあるでしょう。けんかすることもあつていい。しかしそうであっても、その人を人として認め、尊重していくということ、それがなかよくするということではないのでしょうか。

大切なのは、人はそれぞれ違うということ、しかし、人は仏さまの前では等しく大切な命であり、そのままで尊いのだということを感じていくことだと思います。

## まことの保育の願い